

## 研究・調査報告書

|  |                   |
|--|-------------------|
| 報告書番号  | 担当                |
| 182  | 滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学 |
| 題名（原題／訳）   |                   |
| Alcohol use among pregnant and nonpregnant women of childbearing age - United States,<br>1991-2005/妊婦と出産適齢期女性における飲酒について；アメリカ 1991-2005   |                   |
| 執筆者  |                   |
| Centers for Disease Control and Prevention (CDC).  |                   |
| 掲載誌（番号又は発行年月日）   |                   |
| MMWR Morb Mortal Wkly Rep. 2009 May 22;58(19):529-32.  |                   |
| キーワード  |                   |
| 飲酒、妊婦、出産適齢、未熟児   |                   |
| <p><b>要 旨</b></p> <p>妊娠中の飲酒は胎児アルコール症、先天性欠損、低体重を含む患児出産の危険因子である。アメリカでは胎児アルコール症の有病率は1,000例あたり0.5-2.0例と見積もられ、他の胎児アルコールスペクトラム障害(FASDs)では胎児アルコール症のおおよそ3倍の発生頻度と考えられる。2005年の妊娠時の飲酒に関する米国公衆衛生局長官勧告では、妊婦または妊娠の可能性のある女性は飲酒を控えるように勧めている。大量飲酒は特に胎児の脳の発育に有害である。ヘルシーピープル2010の目標には飲酒を控えている妊婦の割合を95%へ、大酒飲みを控える割合を100%へ引き上げることが含まれている。アメリカで妊婦と妊娠適齢期の女性の飲酒者・大酒者の割合とこれらの飲酒様式をもつ女性の特性を調べるため、CDCがBRFSS調査(行動危険因子サーベランスシステム)からの1991-2005年のデータを解析した。その知見によると妊婦と妊娠適齢期の女性の飲酒者・大酒者の割合は1991年から2005年まで実質的に変化がなかった。1991年から2005年までの間で何らかの飲酒をしている妊婦の割合が最も高かったのは35-44歳(17.7%)で、大学院生(14.4%)、被雇用者(13.7%)、独身者(13.4%)であった。衛生・健康部局は妊婦と妊娠適齢期の女性には欠かさず飲酒状況を聞く必要があり、妊娠中の飲酒のリスクを教えるべきであり、妊娠中または妊娠の可能性のある女性には飲酒しないように助言すべきである。</p> |                   |